

## 伏したる水

ふと出づる馥郁たりし思ひ出は伏したる水の出づることくに

蘇生

長かりし旅の終りの夏の野に伏流の水いのち溢るる

真奈

母病んで君への電話気後れり真夏の恋は逃げ水のごと

鮫鯨

蝸の三部合唱佳境なり夕べの膳の整ふるころ

雛菊

蝉ひとつ病みし智恵子の掌に生れて青き空恋ふ折紙の色

真奈

あたららの空を恋ひにき智恵子なりいたみし生涯 才を思へり

れん

名なぞなき市井のひとりひとりとて秘めた才あり艶な生あり

蘇生

バクダンや米櫃掠めぼんあられ盗む才ありなにより甘味

海月

はつきりと原爆投下の年月日答ふる孫と蝉時雨聴く

文枝

決然と広島市長の声高くいまだ戦さの止まぬ世を衝く

真奈

わが裡につね新しき悲しみの『わだつみの声』とこしへの川』

かわせみ

グラマンの爆音うなる低空に兵士が見えた十歳の夏

蘇生

被爆の手突きあげられし闇の中青き燐光したたらせつつ

真奈

黒き川ほたるのいたよ黒き空さくら橋などけして渡らぬ

海月

長崎の聖母の瞳失せしとかその業為せしキリストの国

白馬

被害者としてのみ語る加害者よ吐き捨つること恨「はん」の友言ふ

丹仙

異議のありやぶさかでなし加害者は酒酌む朋はいかにとやせむ

海月

いつの世も爆弾落とさる民に抛りのり超えゆかむ民族の壁

真奈

地べた見い裸電球オモニアリラン恨など云わず裳裾擦り切れ

詠人知らず

はるばるとわが世にも寄す土用波ここに砕けて白く果てなむ

蘇生

尹東柱の詩に聴き入る敗戦日六十年前我は小三

文枝

吹き晒す風の痛みよ天の星見上げて汝「なれ」の誓ふ十字架

丹仙

八月の星のまたたく延暦の歌舞に祈るや最澄入寂

蘇生

またたきを幾つしたるや歲月ぞすぎゆきかくも永らえきたり

れん

プロメテの眼のうるみをり花うばら昭和の馬の冷やされぬまま

真奈

昭和にはあれこれあるも平成は平成りまどかに太る馬鈴薯

鮫鯨

君去りて四年になりぬこの秋も馬鈴薯の花白く咲きけり

弁慶

ジヨッキ持つ腕絡ませて学生歌ジャーマンポテトの皿も踊るよ

真奈

わが声も轟く歌声喫茶店カチューシャの歌懐かしきかな

弁慶

眼前のドンコサツクの歌声に打ちのめされた半世紀前

蘇生

「ともしび」のにぶき光に額「ぬか」あつめ夢みたること若かりしこと

かわせみ

「きーよ」でジャズを聴きました「ともしび」は学ラン脱いだ中学のこと海月

歌あらば千代に八千代に集ひ来て星ら輝く銀河の岸边

鮫鯨

還暦をはるかに過ぎし男らのメンネルコールの響きよ夢よ

蘇生

還暦は瞬く間に過ぎにけり余命幾許神のみぞ知る

弁慶

瞬けば孫もひ孫も増へにけり種に起源あり爺「じい」に週末

鮫鯨

一族の傘が干されて膨らんでいざ総選挙どこに追ひ風

真奈

もてなしは缶ビールだけと憤る人を見て純ちゃんに一票

海斗

ビール缶握り潰しの芝居打つ政人「まつりびと」には愛想尽きたり

蘇生

台風の猛威に晒さる被災地の明日こそ守れ期日前投票

文枝

妻も子も選挙に行けぬ家長をりみんなに聴いて投ず一票

鮫鯨

改革をすれば世の中上手くゆくもう聞き飽きた述べて作らず

弁慶

名月は相似し色に現われつ去年に相見し父は逝きたり

蘇生

風立ちて風色めきてけふの月遙かに照らせこの国の先

真奈

紺碧の空にくつきり満月の強き光に打たれるもよし

雛菊

満月は天心辺り北見れば空の彼方に富士の山影

弁慶

月こそは天の臍なり雲ながれ白き腹見ゆ眠れる天女

鮫鯨

君去りて三年となりぬこの秋も白萩の花野の道に咲く

弁慶

新参の父に手向けん草の穂の黄泉にとどけよ初彼岸かな

蘇生

山裾に桔梗と野菊あかまんま花咲く果てに君が奥津城

弁慶

夕暮れの山裾のむら彼岸花あいをもひつつ帰る途の辺

れん

赤でなく咲いてゐるのは桃色の彼岸花ゆゑ望をつなく

たまこ

鉄路錆び風吹き抜ける廃駅の庭に咲きけたるあかまんまかな

弁慶

ベッドより庭見る父の好みしは控えめの白銀水引なり

雛菊

長生きを悲しむ母の眼先に水引草の紅がさゆらぐ

たまこ

生きる日々が辛いと母はベッドにて可哀相ねと父の初七日

蘇生

一方的にすねて怒つてゐし母が「いい人だった」と亡き父を言ふ

たまこ

生きてゐる微かな証ありがたし逝きて命の重みずっしり

文枝

日数へと盛りゆくなり花芒黄泉への父の道しるべかな

蘇生

野の道の奥に鎮まる我が父の奥津城訪えば蔦紅葉映ゆ

弁慶

激動の昭和を生きしわが父の雷なつかし抗ひの青春

真奈

雷鳴の轟き渡るダムの上湖底に描く古のあり

文枝

さらさらと生きてゆけよと諭すごと彼岸の空に雷が鳴る

たまこ

青北風に雁の列ゆく空の未来し方われも渡りに似なむ

蘇生

雁飛ぶや西行越えし白河の関路を燃やす夕焼けの色

弁慶

曇天のままにひと日が暮れてゆく色づく前を楓が伐られ

たまこ

十月の三日つづきの秋雨に色に出でけりたわわの柿は

蘇生

柿の木を揺すれば数多実の落ちて老いた農夫の喜びの顔

弁慶

明るさは何にも勝る柿の実が時雨にぬれてきらきら赤し

たまこ

秋雨が秋波に古りて月はなく老眼鏡に曇る豊頬

深海鮫鯨

秋深む言えどかなしき空洞化この世ののぞみ何処につながむ

れん

悲しみの波の次々押し寄せり朝夕の二四時間

文枝

いたわらむ私自身を休もうと決めても心がもはや痛まぬ

たまこ

君に飽き来たらば山の紅葉より赤き猿をり我に舌出す

深海鮫鯨

歩をゆるめ視線を上にくぐらして錆びに向いし木々を愛でなむ

蘇生

気づかずに撓めてきたる民の樹よ戦後六十年の黒き領絡

真奈

浸みこんだ雨がぼたんと落ちてくるぼたんぼたんと胸いつばいに

海月

雨音がフォルテにしげく早暁の浅き眠りを敲きをるなり

蘇生

降りつづく雨は頭蓋を穿つやらん遠き記憶に悲しむ夜は

ぎを

わが脳に蜘蛛が糸張る秋なれどあしたに晴れらば露は光らむ

深海鮫鯨

蜘蛛の巣が枯れ葉を止めて風のなか寂しいだけの人生のやう

たまこ

淋しさは最後のやすらぎつきつきに散りゆく秋にただ耐ふ我は

ぎを

光あり紅葉が埋む晩節は花の二月にまさらむとこそ

深海鮫鯨

飛鳥川紅葉散る散る淵のうえ恋の終わりのしるしなりけり

弁慶

純愛は「世界の終り」ただ過去の記憶をめくり読みふける日々

ぎを

カーテンを揺らすのは秋の風なれど今が最も良き時とせむ

たまこ

カーテンを揺らす秋風身に沁みて寂びしかりけり君去りし後

弁慶

日数へて形見の撥に遠き日の爪弾き思ふ秋の灯の下

蘇生

金と銀いづれ扱むや木犀のかをり姦しもの思ふ秋

ぎを

金銀のいづれ劣らぬ木犀にときに迷うも自然なりけり

蘇生

地におりてなにをかかたる木犀の金と銀とを風が吹き寄す

寂

木犀に零犀想ふ秋の夜君が芳香吐きをる木精

深海鮫鯨

木犀の香り纏いてペタル踏む胸に刻みし今日の言の葉

文枝

自転車はまどろむ夏の遠駆けを俣びて待てり森に帰る日

ぎを

山辺の道に咲きたる吾亦紅大和三山秋霞の中

弁慶

言葉などいらぬときあり吾亦紅弁慶さんの写真のふたり

深海鮫鯨

占いを今日は真に受け出でてゆく「あなたは一人で立ち直れます」

たまこ

惑へども潔さもて生くべしと秋天深く澄みわたりたり

ぎを

澄みわたる大空のもと初雪の富士を眺める心地よき朝

弁慶

限りなきブルーに透ける秋空に心の筆で大と揮毫す

蘇生

桃李和歌連作百首歌集

第六七〇一首より六八〇〇首迄

平成一七年七月三〇日より平成一七年一〇月二七日